

クトゥルフの呼び声

Call of Cthulhu

京都哀妖変

シナリオ集 by 偉鷹 仁

鬼風鈴

シナリオ7「鬼風鈴」

イントロダクション

街で中学生・高校生の中にささやかれるひとつの噂がある。「夕暮れ時に見慣れぬ者達が徘徊する」というものだ。数十年前の頃の服装を纏い、もう一つの「まち」が出現するというのだ。

風が吹く。最後を誘う風が。二十戸ほどしか家屋のない寂れた村に。

広場では、無邪気に遊ぶ子供たち。日本昔話の中に登場しそうな粗末な手縫いの着物を着た童が笑い声を立てている。

その村はビル街の谷間に存在する……誰にも知られず、しかし、誰しもの間に。

「そこ」に迷い込んだことのあるという男が言った。「……そう、ぼっかり、とあの町はあったよ。とある角を曲がったらそこには茅葺き屋根のふるうい町……いや、村といったほうがいくらいの小さな、けれどひろびろとした、ね。」その男が誰なのか、誰も知らないが。

夕暮れのビル街に重なり合って存在するその村には、冬だというのどこからか風鈴の涼しげな音色が響き渡るという。音色は深く、ふかく、そして、とても遠いはかな……。

プレイヤー用情報

・探偵系のキャラクター

ある日、某富豪の使いと名乗る弁護士、朱月幻峰がやって来ます。彼は古ぼけた「風鈴」を持って来ており、その出自を調べて欲しいと持ちかけられます。なんでも危篤の現当主 養子らしい事を匂わせませす が貰われて来たときに持っていたものらしいのですが現当主は貰われて来る時、事故に会い、記憶を無くしているのですが、いざ来る死に際して自分の過去が気になったらしいのです。

朱月氏は前渡金として200万ほど持ってきており、この金は依頼の成功・不成功にかかわらず、手付として収めてもらってよいと話します。

物自体を調べると、相当な年代モノであることがわかります。原料は鉄らしいのですが、精度が非常に高く、とても製作年代で割り出された時代に作れるものではなく、いわゆるオーバーズです。横腹には奇怪な何ともいえず文様が刻まれており、見続けていると脳みその中が痒くなっていくほどです。あえて文様に似ているものといえば猿か熊でしょうか。そんなありふれた動物にたとえるには、あまりに邪悪な印象を受けるのですが……。

調べ続けると、京都の郊外、町はずりで似たようなものが見かけられたということがわかります。これは噂として伝わってきたため、真偽は定かではありません。また、これ以上はそちらに行って見なければ判りません。

・その他の職業（但し、探偵との関係者として下さい）

探偵とかかわりのあるキャラクターは「経費は富豪持ち」というところに付け込んで同行することが望ましいのですが、もし独自に行動したいと言った場合は、学生などと同じ扱いで、調査先の地元の人物として、シナリオ開始から間もないうちに合

流させてしまうことをお勧めします。

・弁護士のキャラクター

朱月氏のかわりに富豪の使いとして位置付けるのもかまいません。その場合、仕事の詳細を確認するためと称して山あいの町に同行させられますが、富豪に関してはあまり知らないものとします。朱月氏であれば同行せず、富豪の代理として事件の真相を明かす役割とありますが、探索者として扱う場合は富豪の屋敷へ最後に招く役をさせてもよいでしょう。

・学生のキャラクターなど

これらはその土地に住まうものとするのが望ましいです。その場合は近所で話題になっている「幽霊村」のことを知っています。また、このあたりの家紋がぬいぐるみの熊のような意匠であることも知っているのので、「風鈴」を持ったキャラクターがそれを話題に出すと、「知ってるよ…あ、でも違うかな」というような反応を示します。これはこのあたりの人であれば大概同じような反応です。

この系統のキャラクターが複数いた場合は彼らの中で「肝試し」的にそこへ行き「風鈴」を鳴らしてみようという話になっていることにしてもよいでしょう。また、「幽霊」の一人である菜恵と小さい頃遊んだという設定などつけて、好意を持ったキャラクターとしてもよいでしょう。

各探索者達はそれぞれの理由で街を歩き、偶然（笑）関わりを持ちます。

この町を探すと似ている風鈴は多いが、まったく同じ風鈴は山のふもとにある廃墟にかかっているのみです。町の人に聞きたび幸運ロールをし、成功するとそのことを教えてもらえます。

廃墟に行くと菜恵の「幽霊」があらわれますが、ぼやけており、そこにいることくらいしかわかりません。彼女は縁側からあがれる部屋の中央にあり、ちょうど真上には天井から「風鈴」がかかっています。

風鈴の真下に来た時（さらにPCが全員そろっている時）風が吹き、天井の風鈴が鳴り出します。共鳴するかのようにPC側の風鈴も鳴りだすと、周囲の風景が歪み、CON2倍のロールに成功しない限り気絶します。気絶しなかった探索者は、周囲がどんどんとフィルムの逆まわしを見ているかのように時間を逆に迎っているような光景を目の当たりにすることでしょう。

・街で聞き込める噂

1. たそがれ時に街を歩いていると、突然ある角を曲がったとたんにまったく別の「村」へ出てしまう。そこはとても広々としていて、郷愁を誘うような場所であるとい、なぜか元の世界に帰る気がなくなってしまうという。
2. たそがれ時に街を歩いていると、どこからともなく着物姿の子供たちがわらいながら駆けて行く。彼らとはぶつかるとはなく、すり抜けてしまう。
3. たそがれ時に街で風鈴を鳴らすと異形の小人があらわれて食べられてしまう。この小人の姿は人によってまちまちで、真っ黒な西洋のゴブリンのようなという者もいれば、真っ赤な昔話に出てくるような鬼、と言うものもいる。

クトゥルフの呼び声

マスター用情報

探索者達が現れたのは、ほとんど子供だけの町です。時間を越えてしまったため、探索者達の体は節々が非常に痛みます。

多くの子供たちは不具者で、何がしかの奇形を体に持っています。探索者達が何か尋ねても、面白いだけで有用な情報を話そうとはしません。

しばらくあたりを探すとようやく、子供というには少し年のいった少女を見つけます。それはあの「幽霊」の少女でした。

探索者達が何か尋ねたり頼んだりするのなら彼女は大抵のことは快く引き受けてくれるでしょう。彼女の名は「菜恵」。

菜恵の家は割と広く、東北の窓に風鈴が一つかかっています。

何か言おうとした孫娘にむかって、爺「菜恵！...夕飯のしたくをせい！！」と叱る。姿は見えません。

何故か冬なのに風鈴がかかっています。

「いいかげんはずしたらどうですか？」と聞いても「...いえ、冬は特につけていなければ」と言い、その訳は話してくれません。

この村の人間はみな苗字が赤桐（しゃくぎり）という名です。

菜恵（なえ） 16才 女

黄色い和服のよく似合う少女。

探索者たちには献身的に尽くしてくれる。神楽とは許婚の間柄。

彼女が作る野草などを材料にした料理は非常に美味である。彼女自身は非常に小食であるが、作るのは趣味らしい。

探索者たちにも毎食おいしいものを提供してくれる。

神楽（かぐら） 18才 男

赤桐村の村長。しかし表面上はただの青年。菜恵を好いてはいるが、村のことも大事に思っており、「新しい血を入れれば奇形も減るかもしれない」という考えを持っている。

この村には20才以上の人間はいない。また、完全自給自足のので外界と接する必要もない。

村には奇形の子供が多いが、菜恵はその子らにもわけへだてなく接します。マスターは彼女のやさしさをアピールしてください。

探索者たちの痛みは治るまで約2週間ほどかかりそうです。それを考え菜恵はほっとします。それは探索者達が動けないわけではなく、2週間たてば出て行ってもらえるからです。

彼女は探索者たちに自分達の真の姿を見せたくないのです。ゆえに早く出て行って欲しいと考えています。

見てしまえばこの村から出すわけに行かなくなるからです。

好奇心で探索者が村のあちこちを見ようと長期滞在を希望し

なければ早めに症状のでてしまった者を出し、強制的に見せませす。あたかもこれが「見せたくないこと」であるかのように。

見てしまった探索者たちに対して、菜恵は

「はやく、今のうちに出て行って。今ならまだ追っ手がからないから」

といいますが、その時は神楽が出てきて

「もう遅いよ。彼らをここから出すわけには行かないんだ」と言い放ちます。手には小さな錦袋を持っています。

菜恵はそれを見て驚愕します。

「！...それは、け、契約の...」

「そう。契約の粉だ」

「なんで...」

「しょうがないだろう？」

「みなさんっ、早く逃げて！！」

「もう遅いって言ってるじゃないか」

「?...まさか」

「そうさ、君が作った食事にもうとっくにいれておいたよ。数日前にね。体がだるくないかい？ 君達。」

「そんな...そんな...」

恐慌状態に陥る菜恵。神楽は探索者たちを村に留めておきたいのです。村は近親結婚のため、奇形発生率がここ数世代うなぎ上りになっています（実際はそれだけが理由ではないのですが）。彼は奇形を食い止めるため、昔、蔵で見た本に書いてあった「近親婚が奇形化を推し進める」という話を信じています。

実は、風鈴は「夜鬼」と呼ばれる小鬼を呼び寄せるためのものです。

この村の人間は「小鬼」を食べ「栄養」を蓄えておかなければ彼女達は冬を越すことができません。「小鬼」は風鈴を目標に山のふもとからやって来ます。他の季節はまったく食べなくとも大丈夫なのです。

古の「契約」でそういう体になっているのです。

その代わり彼女達は飢える事はありません。普通の食べものは食べなくとも生きていけます。ただし代償に、20才までしかない寿命という枠があるのです。二十歳になると、どこからともなく聞こえてくる風鈴の音色 そう、彼女達が軒に下げている風鈴とよく似た音色のものです が響く。これが聞こえると彼女達はふらふらとどこへともなく消えて行きます。言い伝えによると一人だけこの音に逆らったものがいるらしいのです。その者は家の柱に体を縛り付けて拒んだそうですが、翌朝、体が内側から破裂したような部分が体じゅうにできた状態で発見されたそうです。

菜恵は契約の粉を探索者達に飲ませてしまった神楽に対して恐怖を感じます。それにより菜恵の心は神楽から離れて行きますが、それを知り、愕然となった神楽は探索者達を引きとめるどころか、恐慌状態になり、探索者達に襲いかかります。

神楽の体は怒りと「契約」によって変化し、まるで数種の動物をゴッチャに混ぜたようなおぞましい形となってしまいます。

神楽を倒すと「はやく逃げろよ…」彼は言います。「契約の粉なんてない。君達の食事に混ぜたのはたいした薬草じゃない、ただだからだがるくなるだけのしろものだ。どっちにしろこの村はもうおしまいだ。…一つ頼みがある、彼女を、菜恵を君達と一緒に連れていってくれ。あいつだけは助けたいん、だ、…。」ここまで言うと神楽は息絶えます。

赤桐(しゃくぎり)村 もとは「赤霧」あかむ アーカムに語源ですが、桐の木が採れるようになってからこう変わりました。

一見、年寄りなどがいるようにも思えるときもありますが、すべて神楽や他の者達が演じている声だけの人物です。これは探索者達を安心させるための神楽の計画です。

また、この村から出るためには山の麓にある「夜鬼」の住む洞窟を通らねばなりません。一番奥まで行くとそこは行き止まりで、「狂えるヴァイオリニスト」の精神体が存在しています。彼は問い掛けます。「なぜそんなに苦しい生を生きようとするのか？」と。どんな形であれ、この問いになんらかの答えを出せば彼は一曲弾いて空間の歪みを解いてくれるので、探索者達はもとの世界に帰ることが出来ます。誰もこの問いに答えることができなければ「狂えるヴァイオリニスト」はこの空間をレンの荒野につなげ、ナ=ハグのもとへと探索者達を送り込んでしまうでしょう。

事件の真相

富豪は赤桐村の出身です。また、富豪とは「沙条」家であり、「旧支配者」の一部を操る力を持った家柄である「東乃宮」の分家筋です。その前当主は3歳で貰われてきた養子で、「契約」の「証」を洗い流されています。かの家にはそういった技術もあるらしいのです。もし菜恵を連れ出したなら彼女はこの沙条家で暮らすこともできるでしょう……「契約」の影響を受けることなく。

赤桐村はそもそも天狗が開いた村であるという伝承が付近の町の郷土館には残っています。天狗とはアメリカ人で、アーカム出身の「狂えるヴァイオリニスト」です。それゆえここ近辺の天狗伝説には曲を奏でる天狗と言うものが存在します。この天狗はこの地で「幻夢郷カダス」への門を開いたのです。この地に住む人々が飢饉のおり、苦しむのを見かねた彼は知り得てしまった禁断の秘儀を用いて彼らを飢え死にする事のない体へと変貌させました、方法の一環として。ですが、代償として寒さに対する極端な非順応性と20歳を過ぎると「呼ばれて」しまうという存在となってしまったのです。

人の夢に狂気をもたらすというレンに住まう魔物、ナ=ハグの元へいざなわれる宿命。彼らが呼ばれてその後どうなったかを知るものはいません。

ただし、すでに数十年前、たぶん第二次世界大戦ぐらい、に村がなくなったことと資料には書いてあります。しかし、この村は在り続けたのです。「狂えるヴァイオリニスト」の奏でる曲の作った異空間に……。

もとの世界に戻って来て富豪に真相を説明するか、赤桐村に永住を決断するか、レンの荒野に行き魔物に食われるかすれば本

シナリオは終了です。

付録

・桐：ごまのはぐさ科の落葉高木。五月ごろ、うす紫色の花を開く。材は軽く筆筒などの材料として用いられる。

・赤桐：桐の変種。樹皮が赤茶色である以外は桐と同じ。